

古代歴史文化に関する優れた書籍を表彰

## 「第6回古代歴史文化賞」 受賞作の決定について

「古代歴史文化賞」は、平成25年に創設された賞で、奈良県と島根県・三重県・和歌山県・宮崎県が連携して古代歴史文化に関する書籍を表彰することを通して、国民の歴史文化への関心を高め、豊かな歴史文化に恵まれた各県の交流人口の増加を促すとともに、各県民の郷土への自信及び誇りを醸成することを目的としています。

この度、「第6回古代歴史文化賞」の大賞及び優秀作品賞が下記のとおり決定しましたのでお知らせします。

記

### ＜古代歴史文化賞 大賞＞

「儀式でうたうやまと歌 木簡に書き琴を奏でる」／塙書房

著者：犬飼隆（いぬかい・たかし）1948年愛知県生まれ

### ＜古代歴史文化賞 優秀作品賞＞

「古墳の古代史 東アジアのなかの日本」／筑摩書房

著者：森下章司（もりした・しょうじ）1963年愛知県生まれ

「日本神話はいかに描かれてきたか 近代国家が求めたイメージ」／新潮社

著者：及川智早（おいかわ・ちはや）1959年岩手県生まれ

「文明に抗した弥生の人びと」／吉川弘文館

著者：寺前直人（てらまえ・なおと）1973年奈良県生まれ

「倭の五王 王位継承と五世紀の東アジア」／中央公論新社

著者：河内春人（こうち・はるひと）1970年東京都生まれ

★ 第6回古代歴史文化賞 受賞作品一覧 ★

書名	著者名	作品の概要	選定の理由
	出版社・年・価格		
<b>儀式でうたう やまと歌</b> 木簡に書き琴を奏でる  	いぬかい たかし <b>犬飼 隆</b>	遺跡から出土する歌を書いた木簡をもとに、古代日本ではやまと歌が儀式の音楽として歌われていたこと、儀式は中国から朝鮮半島を通じて日本の7世紀に導入されたこと、8世紀には儀式での歌が日本古来のものと認識され、そこから和歌が誕生したとする。和歌の起源について大胆な仮説を提示した作品。	本書は、現在日本の伝統的な文化と考えられがちな和歌について、民謡などでうたわれてきた「うた」が、7世紀頃に朝鮮半島を経由してもたらされた漢字文化のなかで儀式で歌われる「歌」となり、それが文学の「和歌」として定着したという、和歌の成立についての大胆な仮説を提示した書です。著者は本書のなかで、「歌」の書かれた木簡の分析から儀式で歌が歌われたことを論じ、日本の漢字文化における朝鮮半島の影響の重要性、古代日本の音楽制度の変遷、歌うとき琴を奏でる文化などを取り上げ、歌の成立について多角的な側面から総合的に検討し、自らの説を説得力のあるものとしています。また、歴史用語については現代の言葉に言い換えるなどして、難しくなりがちな古代の制度の歴史について、一般の読者に理解しやすいよう配慮もなされています。本書は「和歌」成立以前の「歌」の姿について具体的に明らかにしただけでなく、その過程について、東アジアのなかで日本の漢字文化がどのように成立したのかを踏まえて歴史的に考察しており、日本の伝統とはどのように形成されたかを考えさせる著作といえます。古代歴史文化賞大賞にふさわしい作品です。
塙書房 H29. 7 本体1200円			
<b>古墳の古代史</b> 東アジアのなかの日本  	もりした しょうじ <b>森下 章司</b>	日本では前方後円墳という独自の王墓が古墳時代を通じて営まれる。これを東アジア各地の王墓と比較して、日本の王墓は中国で権力を誇示する大きな墓が衰退した時代に成立し、内部構造や管理形態などが異なることを指摘する。日本の古墳の特色を世界史的に明確にした作品。	本書は、東アジア各地の王が造営した墳墓の形態にそれぞれの地域の性格が現れることを足がかりに、古墳から日本の王権や国家の特色を明らかにした本です。日本の古墳を東アジア全域にわたる分析から評価したうえで、地域の特性とはどこから発生していくのかを考えさせる書籍であり、古代歴史文化賞優秀作品賞にふさわしい作品です。
筑摩書房 H28. 9 本体860円			
<b>日本神話はいかに 描かれてきたか</b> 近代国家が求めた イメージ  	おいかわ ちはや <b>及川 智早</b>	現在の日本人が思い描く神話のイメージとは、近世から近代にかけて、『古事記』『日本書紀』の神話が再解釈され定着したものであることを、図像の変遷から明らかにする。神話とは変容するものであり、近代における日本神話の浸透に図像が大きな影響を与えたことを論じた作品。	本書は、日本人が思い描く神々の姿や神話のイメージがどのように形成されてきたのか、近世から近代にかけての図像を分析することを通して検討し、それが『古事記』『日本書紀』の内容を忠実に反映したものではなく、描かれた時代の要請によって再解釈されて変容してきたものであると結論づけます。従来注目されることの少なかった神話の図像を丹念に読み解く手法も新鮮で、日本人が神話をどう捉えてきたのかを考えさせる著作であり、古代歴史文化賞優秀作品賞にふさわしい作品です。
新潮社 H29. 10 本体1200円			
<b>文明に抗した 弥生の人びと</b>  	たらまえ なおと <b>寺前 直人</b>	朝鮮半島から稲作文化が九州に取り入れられ、やがて東日本に伝播していったという従来の弥生時代像に対し、日本列島内の社会は多様であり、先進的な文物により統合が進んだ社会と、集団や個人の平等を維持する方向の社会が併存したととする、斬新な時代像を提示した作品。	本書は、水田稲作や金属器利用が九州から東日本に広がる時代とされてきた弥生時代について、統合を進めた社会と、それに対抗する縄文時代からの伝統を引き継ぐ平等を維持する方向の社会が併存したと述べます。この時代の日本列島の歴史が、文明を受け入れ、発展していくという方向性だけでは捉えきれないことを示した著作であり、古代歴史文化賞優秀作品賞にふさわしい作品です。
吉川弘文館 H29. 7 本体1800円			
<b>倭の五王</b> 王位継承と 五世紀の東アジア  	こうち はるひと <b>河内 春人</b>	5世紀に中国に使者を派遣した倭の五王、それぞれの王が行った外交を分析することで、外交の目的が何であったのか、そして中国朝鮮と交渉する過程で、古代王権がどのように成長していったのか、日本の古代国家の成り立ちを外交から明らかにした作品。	本書は、倭の五王が派遣した使者の記録について、この時代の朝鮮半島や中国王朝の政治的な動向とあわせて分析し、さらにそこにみえる倭国の外交や王権のあり方を検討した書です。この本で著者は、過去の研究史を踏まえながら、わずかな使者の派遣記事を丁寧に分析し、5世紀の倭国の姿を浮かび上がらせることに成功しています。倭国の形成において、外交や国際情勢への対応がいかに重要であったかをわかりやすく説いた著作であり、古代歴史文化賞優秀作品賞にふさわしい作品です。
中央公論新社 H30. 1 本体860円			